

巻 頭 言

聖泉大学 学長

木 村 知 子



2022年度は、願っていた COVID-19の終息もままならず、第8波のピークが過ぎつつある中、ここにきて政府は、2023年3月13日より、マスク着用は個人判断に委ねるとし、5月8日に COVID-19の感染症法上の位置づけを季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行すると決定しました。

2022年度をかえりみると、ウクライナでの長引く戦争をはじめ、元首相の襲撃事件等、悲しい事件や災害も多々ありました。一方で国民に元気をくれた FIFA ワールドカップ、日本チームの決勝トーナメント出場、若者の活躍には目を見張るものがありました。

看護界においては、コロナ禍で翻弄される経営方針、その対応のために度重なる病棟編成や人員配置、クラスター対策等、病院や施設の看護職員の方にとっては相変わらず大変な年でありました。このような状況下で、コロナ禍の制限された実習にくじけず、看護の道を邁進する学生たちがいました。これまでと違う成長のあり様であることから、個別性、多様性を大事にする新たな対応等で、共に育っていきたいと思います。大学内でも Zoom による遠隔授業や Web 会議のシステムの導入が定着してきて、予想される大雪の状況等にも臨機応変にできるようになったことは、この3年間の時代の変化と思われる。

さて、聖泉看護学研究も第12号を発刊することができました。看護学部開設より12年が経過しました。今回は、本学大学院看護学研究科修了生の投稿も多く、原著3件、研究ノート5件、資料2件、その他2件で合計12件という構成になっています。多くの外部査読者には、大変ご協力をいただきました。

この度の聖泉看護研究第12号の発行におきまして、編集委員長をはじめ編集委員の先生方、査読をしてくださった学内外の先生方、担当事務の方に深く感謝いたします。

